



Title	1. つながり創出型ピア・サポートの成果と課題 : ピア・サポートの積極的存在意義と活発な活動の持続に向けて
Author(s)	岡本, 健
Description	第1部: つながりを創出するピア・サポート
Relation	北海道大学ピア・サポート活動報告書(平成23年度版) p.1-26
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49490
Type	report
File Information	01.okamoto.pdf



1. つながり創出型ピア・サポートの成果と課題

ーピア・サポートの積極的存在意義と活発な活動の持続に向けて

岡本健¹

1. 大学におけるピア・サポートの積極的存在意義と活発な活動の持続

本稿の目的は、2点ある。

1点目は、ピア・サポート活動の積極的な存在意義について考察することである。

2点目は、ピア・サポート活動を活発に持続させていくために必要なこととは何かを考察することである。これらの目的を設定した背景は次項で示す。

本稿では、目的を達成するために、以下の方法を取る。それは、北海道大学ピア・サポートを実際に運営し、どのような成果が見られ、課題が抽出されたかを検討するという方法である。筆者は、2009年11月の立ち上げ時から、2011年9月まで、北海道大学ピア・サポートの代表を務めてきた。その任期中に、様々なことを考え、実行してきた。ピア・サポートの立ち上げに関しては、岡本(2011)に詳しいのでそちらにゆずるが、代表の任を終え、活動を振り返った時に、著者が最も心を砕いた点はどこだったかを考えると次の点が思い浮かぶ。まず、ピア・サポート活動に積極的な存在意義をどのように付与するのかという点、そして、ピア・サポート活動を活発に持続させていくためには何をすべきなのかという点である。この点は、事項でも整理するが、ピア・サポート活動を実際に運営するにあたり、他大学の取り組みにおいても重要な論点となっている。本稿は、この二つの論点について、筆者なりに考えながら北海道大学ピア・サポートを実際に運営したことについて整理し、その成果と課題を抽出するものである。客観的なデータを示した論文というより、実践者の感想であるが、ピア・サポート実践をおこなっている人、あるいは、これからおこなおうとする人に、少しでも参考になる情報となれば何よりである。

2. 大学における学生同士のつながりの構築に関する諸問題

近年、学生同士で学生相談をおこなうピア・サポートシステムを導入する大学が増加している。その背景には、大学における様々な問題がある。たとえば、大学生の学力の底上げの必要性である。あるいは、休学者・退学者、不本意入学など、大学生活に満足できない状態の学生のケアも問題として挙げられる。若干都市伝説的な部分もあるが、便所飯と呼ばれる現象も挙げられる。これは、昼食を便所の個室で食べる、というものである。これは何を意味するのか。ただ昼食を共にする友人がいない、という現象を表したものでは無い。それならば食堂で一人食事を取れば良いことになる。なぜ個室なのか。それは、昼食を「誰にも見られないところで」一人で食べたい、つまり「昼食を共にする友人がいな

¹ 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士後期課程

い」ということを誰にも見られたくないという心理から起こる現象であると言うのだ。実際こういうことが起こっているのかは定かではないが、こういった言説が説得力を持って語られる状況は確かに現出している。

こうした問題の解決策として、学生同士の「つながり」に期待する言説がよく聞かれる。教員に解決策を求める方向性もあり得ると思うのだが、大学教員はすでに様々な職務を遂行しているため、教員によっては学生と懇切丁寧に付き合っている時間が無い者もいよう。そうした時、学生同士で何とか解決してくれるのであれば、教職員にとってそれほど有り難いことは無いと考えられる。

具体的には、学力の底上げについては、先輩が後輩を指導することによって、大学生活への不満や、便所飯に象徴されるような学生の個人化については、同学年や後輩、先輩など、学生同士のつながりによって、それぞれ解決できるのではないかというものである。昔は学生同士の縦や横のつながりによって、こうした問題は現在ほど多くなかったという経験談も、特に年配の教職員によって盛んに語られている²。

つまり、ピア・サポート導入の背景には、以下のような認識があると言えるだろう。それは、大学における諸問題の解決には、学生同士のネットワークが必要と考えられるのだが、現在の大学ではそれが構築されにくくなっているというものである。趣味縁と若者の社会参加との関連を研究した浅野(2011: 125)では、このことに関連して、大学の状況が次のようにまとめられている。

大学に職を得てすでに 17 年になる。この間、一貫して感じてきたのは、大学の中でのコンプライアンス志向とパターナリズムの強まりだ。結果として、学生たちが自分たちで集団を組織し、自治のもとに運営するという機会が少しずつ減っているように思われる。もちろん大学を運営する側から見れば、そのような自治の力が学生の間で低下してきたからこそ、万が一の事態に備えて大学がパターナリスティックに振る舞わざるを得なくなったということになるのだろう。その見方に一理あるとしても、大学の内部で集団運営や自治の経験を積む機会の減ったことが、学生たちの自治の力をさらに未熟なままに押しとどめている可能性も否定できまい。

大学側のコンプライアンス志向とパターナリズムの強まりが先なのか、学生の自治能力の低下が先なのかについての因果関係は明確ではないが、いずれにせよ、その両方が進行しているのは、博士後期課程に在籍している筆者も感じるところである。

このような様々な背景から、ピア・サポートは大学の中における多くの問題を解決する契機になり得るシステムであると考えられ、導入がなされているのだろう。

ピア・サポートの特徴は、これまで教員がおこなってきた学生相談とは異なり、同じ目

² その際、寮生活を送っていた者が多かったというような住環境に関する要因や、部活動の活発さなどの要因が挙げられることが多いように思う。

線、同じ立場に立てる学生同士の相談活動である点だ。早坂(2010)によるとピア・サポートは「仲間による支援・援助活動」である。ただの仲間による支援・援助活動ではなく、次のような条件も付されている。それは、「ピア・サポーターとして訓練を受けた者が自覚をもって仲間を支援・援助する」という点である(早坂 2010)。

学生同士の相談活動であるピア・サポートは、学生は相談相手として学生を選びやすい、というデータに即すると適切な特徴であるように見える。たとえば、法政大学による調査結果を示した土屋(2011)によると、悩みの相談相手として「先輩・友人」が 55.7%、「両親」が 32.5%、「教職員」が 2.5%、「学生相談室」が 1.6%となっている。また、北海道大学学務部(2011)によると³、「北大の友人・先輩」が 36.0%、「家族」が 31.1%、「その他の友人・知人」が 18.3%、「北大の教員」が 0.4%、「学生相談室」が 0.3%となっている。北海道大学の場合も、「北大の友人・先輩」と「その他の友人・知人」を合計すると、54.3%であり、半分以上の学生が相談相手として先輩や友人、知人を選んでいることになる。

そういう意味では、このピア・サポートというシステムは現状に適った最適なシステムのように思える。しかし、ここで、北海道大学学務部の調査結果をさらに詳細に見ておきたい。北海道大学学務部(2011)によると、相談相手として「北大の友人・知人」を挙げる回答者の割合は年々低下しているというのだ。1997 年調査では 38.3%であったのが、2001 年には 37.0%、2005 年には 36.8%、2009 年には 36.0%とポイントとしては少ないが、徐々に割合を下げていく。また、「その他の友人・知人」についても割合が下がる傾向にある。1997 年には 21.6%であったのが、2001 年には 23.3%と一度増加しているが、その後、2005 年には 19.5%、2009 年には 18.3%に低下している。割合の上昇が見られるのは「家族」である。1997 年に 25.2%であったのが、2009 年には 31.1%に増加しているのである。割合の増減として特筆するほど大きいのかどうかは即断できないが、こうしたデータを見ると、「学生同士であれば遠慮なく話し合いができるはずだ」ということを前提としておくのが危うい可能性が出てくると考える必要も出てくる。

少し先取りして述べると、筆者は、この「学生同士」ということに無反省価値を与える部分に、ピア・サポートシステムの問題が含まれていると考えている。「学生同士」「仲間同士」というのは、それだけで親密圏が発生するような牧歌的な関係性ではもはや無い可能性が高い。ある種の緊張感を持った関係性である場合も多くなっているのだ。その背景としては、岡本(2011)でも指摘したように、学生同士のコミュニケーションのあり方の変化が挙げられる。この点について、土井(2008)では、次のように述べられている。現在は、学校教育の現場で「コミュニケーション力」や「人間力」の涵養が重大なテーマとなっている。特に、ビジネスの現場で強く求められる能力として、このテーマが重要視されている。こうした価値観が支配的になると、「腹を割って話しあい、互いの人間性を高めていけるような対人関係を築く能力」は重視されず、「いろいろな交渉事をスムーズに進め、場の空気を敏感に読み取って迅速に対処できるような対人関係の能力」が必要とされるように

³ この調査は 2009 年 11 月に行われたものである。

なり、「人間としての評価」もこうした能力の有無によって左右される事態になっている(土井 2008)。そうすると、学校教育の現場において、安心して日常生活を送るというよりも、学校教育の現場においても、ビジネス的な能力が必要とされ、そうした価値観が浸透することが推測できる。

このような価値観については、宇野(2008)においても異なる方向から指摘されている。宇野(2008)では、1990 年代、2000 年代の映画やアニメ、ドラマなど⁴を分析することによって、描きだしている。たとえば、『野ブタ。をプロデュース』の分析では、やはり場の空気を敏感に読み取ることが若者の間で重要視されていることを指摘している。宇野(2008)によると、この作品は、学校という小さな共同体におけるキャラクターをめぐる闘争を描いたものである。この場合のキャラクターとは、「拭い去れないその人の個性」を指すのではなく、「所属する共同体の中で与えられる位置」としてのキャラクターである(宇野 2008)。

これらの特徴から導き出せるのは、自分というものをきわめて相対的に位置づけ、その場の空気を読み取ってコミュニケーションが円滑に進んでいるように見せかけることに注力する価値観や行動様式である。それはあくまで「見せかけ」であるとし、価値判断の基準が自身にはなく、他者の評価や、他者からのキャラクター認知などにあり、アイデンティティの確立や、人とのつながりで得られる安心感は得られない。菅野(2008)では、このことを「ノリとリズムだけの親しさには、深みも味わい」もなく、「希薄な不安定な関係」しか構築できなくなる、と整理している。

実際、鶴田ら(2010)では、実際の学生の相談事例の中に、学生同士の対人関係に関するものが数多く挙げられており、学生生活の中で学生同士の人間関係が問題の発生源になっていることがわかる。

また、近年の学生を取り巻く情報環境の変化についても無視することはできまい。たとえば、高谷(2011)では、SNS のミクシィを取り上げ、学生にとってミクシィを使うことの意味は何かを問うている。その中で、ある女学生の言葉を以下のように記している。

「現実世界では、どうしても自分を飾ってしまう。作り笑いをしたり、いいたくもないお世辞をいってしまったり。でも、そうしたことを続けているうちに、本音を語りたいというストレスのようなものがだんだん自分の中に溜まってくる。それを吐き出す場がミクシィなんです」

高谷(2011)は、この言葉を受け、次のようにまとめている。

つまり、「場の空気を読むこと」が重要視される現実世界ではなかなか口に出せない本心を、飾ることなく誰でも自由に語ることができる場所、それがミクシィであり、

⁴ 『無限のリヴァイアス』『バトルロワイヤル』『DEATH NOTE』『コードギアス』『LIAR GAME』『野ブタ。をプロデュース』など。

ブログであり、ツイッターであり、つまりウェブというメディアであるというわけだ。

ここでは、やはり、本稿でも整理してきたとおり、学生同士のコミュニケーションは「場の空気をよむこと」が重視されていることが読み取れる。そして、そこでは何らかのストレスを感じ、そのはけ口として、ウェブ上のコミュニケーションが選ばれているというのだ。つまり、学生同士の現実空間上のコミュニケーションは、問題を解決するというよりは、むしろ、問題を引き起こす場となっている場合もあるということだ。そして、その問題の解決は、学生同士の現実空間上のコミュニケーションではないところ（たとえば情報空間上のコミュニケーション）に求める場合もあり得る。

情報通信技術が発展してきたことによって生じた新たな他者関係である「インティメイト・ストレンジャー」も、このことを傍証する。「インティメイト・ストレンジャー」は富田(2009)によって命名された他者関係である。富田(2008)によると、この関係性の特徴は「匿名性」と「親密性」の二つの軸で考えるとわかりやすい。匿名であって、親密では無い人は、これは「他人」である。匿名ではなく、親密な人、これは「恋人」や「親友」である。そして、匿名ではないが親密でもない人、これは「顔見知り」である。そして、匿名であり、かつ、親密である人、それが「インティメイト・ストレンジャー」であるというのだ。特に情報通信技術が発展したため、広く生じる関係性であると指摘している。たとえば、ネット上の匿名掲示板での相手の方に親密性を感じる場合である。こうした他者関係が広くあり得るのだとしたら、ここまでに整理してきたように、身近にいる学生よりも、メディアの向こう側の「インティメイト・ストレンジャー」の方が、相談相手として適切である場合も考えられる。

つまり、ここまでに整理してきたことから、単純に「学生同士であれば対等である」とか、「学生同士だから悩みを相談しやすい」とは言えない可能性を指摘することができる。ピア・サポートは「学生同士」というところを利点と見なして導入されているのだが、そこには顕在化しにくい問題が含まれている可能性が指摘できる。

本稿では、この学生同士であることから生じる2点の問題を扱いたい。

まずは、その積極的な存在意義についてである。ピア・サポートの多くは、大学側が作り出したシステムである。北海道大学においても、ピア・サポートを作ろうと働きかけを行ったのは教員である⁵。こうした構造そのものを取り上げて、「そんなことまで大学が面倒を見るのか」といった声を聴くことが多くある。また、学生側からも「それは大学が口を出すことではなく、学生側でやるべきことだ」という声を聴くこともある。これらはいずれも「ピア・サポート」に批判的なニュアンスが含まれて語られることが多い。ただ、そもそも学生間で自然にサポート機能が働くのであれば、こうしたシステムを作り出す必要は無いのであって、これだけピア・サポートが必要とされ、数多く作られているのは、

⁵ 大畑・岡本(2011)、岡本(2011)を参照。

そのニーズがあると判断されるからであろう⁶。その事実を無視しても話は始まらない。とはいえ、ピア・サポートシステムには学生同士であることによって大きな問題が内包していることも事実である。本稿では、次のような危険性をはらむものとしたい。それは、ピア・サポートシステムが学生による一つの島宇宙になる可能性である。島宇宙とは、ここでは、価値観を同一にした者をメンバーとし、メンバー間の親密性が高く、排他性を生じる小集団のことを指す。学生同士のコミュニケーションの特徴については、先ほど述べた通りであるが、そのような特徴を持った学生が大学公認のピア・サポートに集うと以下の行動が予測できる。ピア・サポートに集まった小集団の中で、自分の相対的な位置をどのように取るかということに腐心し、表面的にはうまくいっているように見せるあり方である。大学側(教員や職員)の意図に沿う「学生らしさ」を演じ、ピア・サポートが機能しているように見せるわけである。実際には、その島宇宙内での人間関係維持に必死であり、よりメタな視点に立って学生全体のために何かをしようという目標を持ち、自発的に創造的に活動することなどは望めない。こうした起こりうる事態に対して、中には、ピア・サポーター同士が仲良くなれたらそれで良いではないか、というような意見もある⁷。それはそれで一向に構わないが、そんな集団を大学の予算を使って作り上げても、学生全体に還元できるような成果は出ないであろう。ピア・サポートという名前の島宇宙が大学という宇宙の一つ加えられるだけである。しかも、大学に公認されて。本稿では、こうしたあり方ではなく、ピア・サポートが積極的に存在感を持つようなあり方とはどのようなあり方を考察していく。

次に、活発な活動の持続についてである。大学におけるピア・サポートの持続性については、多くの大学で課題となっている問題である。たとえば、2012年1月7日に名古屋工業大学で開催された第6回「びあのわ⁸」でのテーマは「持続性のあるピア・サポートを目指して」であった。

ピア・サポートの持続性とはなんだろうか。ただ組織が持続すれば良いのであれば、十分な予算と専任の教員や職員を付ければ済む話であろう。しかし、ここで問題にしたいのは、そういった「ただ組織が存続すれば良い」という話ではない。そうではなく、ピア・サポートの本来の機能を活発に持続させるにはどうすれば良いか、という問題である。本来の機能とは、本稿における一つ目の目的で検討する「積極的な存在意義」を持つこと、つまり、ピア・サポートが学生全体に資する創造的な活動をおこなうことである。

この機能をなしていない状態とは具体的にはどういう状態だろうか。たとえば、ピア・サポーター同士で懇親会や飲み会、合宿などを行うことが主な活動となってしまう場合で

⁶ ニーズが実際にあるかどうかは断言できないが、導入に当たってニーズがあると判断されることが多いということは、ピア・サポートを導入する大学が増加していることから言えるだろう。

⁷ 私見だが、学生よりも教職員がこのように評価することが多いように思う。

⁸ 名古屋工業大学の山下啓司教授が中心となり、多くの大学の学生ピア・サポーターが集い、それぞれの活動を報告したり、交流をおこなったりする会である。岡本(2011)でも取り上げたが、北海道大学ピア・サポートを作り上げる際に、非常にお世話になった会である。

ある。これは、ピア・サポーター同士の凝集性を高める行動であると言えよう。組織において、その成員同士がお互いのことをよく知ることそれ自体は必要なことである。ただ、凝集性が高まり過ぎた組織では、組織内の調和を優先する判断がなされる可能性が高まる。いわゆること無かれ主義である。あまりにその性質が高まってしまうと、ピア・サポートは学生全体に資する活動をする組織ではなく、ピア・サポーター達の島宇宙と化してしまう危険性がある。もう一つの例を挙げる。それは、ピア・サポーターが行う企画に対して一般の参加者がきわめて少ない場合である。一般の参加者とは、ピア・サポーターと直接つながりの無い学生のことである。一般の参加者を動員できる企画、というのは非常に難しい。難しいのではあるが、創意工夫をし、ピア・サポーターと直接つながりの無い学生に企画に参加してもらい⁹、それによって、人と人のつながりを創出できるような存在を目指さなければ、やはりそれは一つの島宇宙が孤立して存在する状況を生む。ピア・サポーターは「自分たちはがんばった」という自意識を持ちつつも、一般の参加者はその企画に参加していない状況となる。こうした状況は、無力感を生むだろう。「ピア・サポートは何の役に立っているのか？」という疑問が成員に生じることとなる。これに対して、「ピア・サポーターは努力したので、客が少なくてもそれで良いではないか。」「動員数の多寡は関係が無い。少なくとも良い出会いがあれば良い。」というような意見が聞かれる。確かにそれはそうかもしれない。しかし、学生自身は、それは動員数が少ないことへのただの慰めにしかっていないことに気付いているだろうし、気付いていなくても、自分が周囲の世界に作用できない無力感は無意識のうちにも蓄積されていくだろう。

このような状態では無く、活発に活動が持続するにはどのようなことが必要だろうか。それを考える際に、ここでは、成員の維持を念頭に置いておきたい。成員の維持とは、成員の人数の維持、そして、モチベーションの維持である。ピア・サポートという組織の一つの特徴は、成員が一定期間で入れ替わるということである。学生が卒業を迎えたり、諸般の事情で組織を脱退したりと、特に問題が無くとも様々な要因で成員が減少する。一方で、ピア・サポーター候補となり得る学生は、毎年新生として大学に入学してくるし、何らかのきっかけでピア・サポーターの活動に興味を持った学生が成員となることもある。このように、大学ピア・サポートの成員の人数は増減の機会が多い。さらに、こうした不可避な増減に加えて、成員のモチベーションが下がることによって、組織を脱退する者が現れたり、逆に、モチベーションが上がることで、活発に活動し、その結果ピア・サポートに入ろうとする者が出てきたりと言った、操作可能な増減もある。

理想的な状態としては、ピア・サポーターのモチベーションが高く、そのため、おこなう相談業務やイベントなどのパフォーマンスが高くなり、それによって、新たな学生がピア・サポーターになる、といった正のスパイラルが望ましい。しかし、このモチベーショ

⁹ 動員数を見かけ上増やすために、ピア・サポーターの知り合いを動員する 경우가良くある。もちろんピア・サポーターの取り組みに友人を参加させること自体は問題無いとは思いますが、そうした参加者のみになってしまう場合、結局のところ自作自演であり、本当の自信にはつながらないだろう。

ン低下の問題は、関係者は重要であると自覚していながらも、なお多くの大学で課題となっている。大石(2010)では、モチベーション低下の問題を「複数の大学の実践で報告されて」いる問題で、「ピア・サポート活動を展開する上での普遍的なテーマの一つである」と指摘されている。

以上、実際にピア・サポートを実施する上で起こってくる具体的な問題を挙げつつ、考察すべき事柄を抽出してきた。本稿では、北海道大学ピア・サポートにおける取り組みを概観しつつ、その中で、ピア・サポートの積極的な存在意義とは何か、そして、活発な持続には何が必要か、という問題について考察をおこなっていく。

3. つながり創出型ピア・サポート

ピア・サポートに期待される機能や取り組み方は、各大学でさまざまである。早坂(2010)では、日本における様々な大学のピア・サポートの取り組みを、以下のように分類している。

1点目は、「相談室型」である。早坂(2010)によると、相談室型とは、「気軽なドロップインの相談窓口として、研修を受けたサポーターが学生のあらゆる相談を受け、必要に応じてカウンセラーなどの専門窓口を紹介する活動」である。例として、広島大学(内野 2003)、名古屋大学(杉村ら 2004)、金沢大学(鈴木 2006)、岩手大学(早坂・大久保 2007)を挙げている。

2点目は、「修学支援型」である。修学支援型とは、「サポーターが学生の学習や履修などの修学面に関して助言し相談にのる」活動のことを指す(早坂 2010)。例として、東北大学(高野ら 2006)、名古屋工業大学(山下・森 2007)、九州大学(九州大学学生生活・修学相談室 2007)が挙げられている。

3点目は、「新入生支援型」である。早坂(2010)では、新入生支援型を「新入生入学時の一定時期のみサポーターを結成して新入生の履修計画や大学生活に関して情報を教えサポートする」活動としている。特に例は挙げられていないが、相談室型ピア・サポートでも「PRを兼ねたイベントとして」実施が見られるとしている(早坂 2010)。

さらに、これら分類には含めていないものとして、「サポーターが教育者になるPS活動」を挙げ、例として、中学や高校の生徒に性感染症の予防教育を行う取り組みを紹介している(早坂 2010)。

北海道大学ピア・サポートは、主に1点目の「相談室型」のピア・サポートである。しかし、2点目、3点目も実施している。2点目について、学習の具体的なところに関しては、北海道大学においては、基本的にはピア・サポートではなく、アカデミックサポートセンターによってなされている。ただ、履修相談や進路に関しては、ピア・サポートへの相談の中でも出てくることが多い内容である。また、レポートの書き方、といった具体的な相談についても、基本的にはアカデミックサポートセンターを薦めるのだが、中にはどうしてもピア・サポーターに見てほしい、という学生もあり、その場合は対応をすることになっている。3点目については、本稿でも確認するが、4月に本活というイベントを行うこと

により、新入生に対する支援とピア・サポート室の周知を行っている。

上記分類に従うと「相談室型」となるのだが、北大ピア・サポートでは、よりメタな機能を考え、「つながり創出型」を目標としてピア・サポート活動を実施している(岡本 2011)。つながり創出型ピア・サポートとは、様々な活動を通して、様々なアクター同士のつながりを作り出していくようなあり方である。大学には様々なアクターがいる。ここでは大きく、「学生」、「教職員¹⁰」、「ピア・サポーター」の3つに分けたい。この3者が大学という社会に暮らしている。そして、注意すべきなのは、それぞれのアクター自体も多様であることだ。「学生」と言っても様々な学生がいる。学部も違えば学年も違う。北海道大学の場合であれば、日本の各地から学生が集っているし、留学生もいる。それと同様に、「教職員」「ピア・サポーター」もそれぞれである。つまり、「学生」「教職員」「ピア・サポーター」のそれぞれの相互作用を作り出していくこと、そして、「学生」「教職員」「ピア・サポーター」のそれぞれの中での相互作用を作り出していくこと、この2つを考えに入れて、これらの「つながり」を作っていく活動が、つながり創出型ピア・サポートである(図-1)。

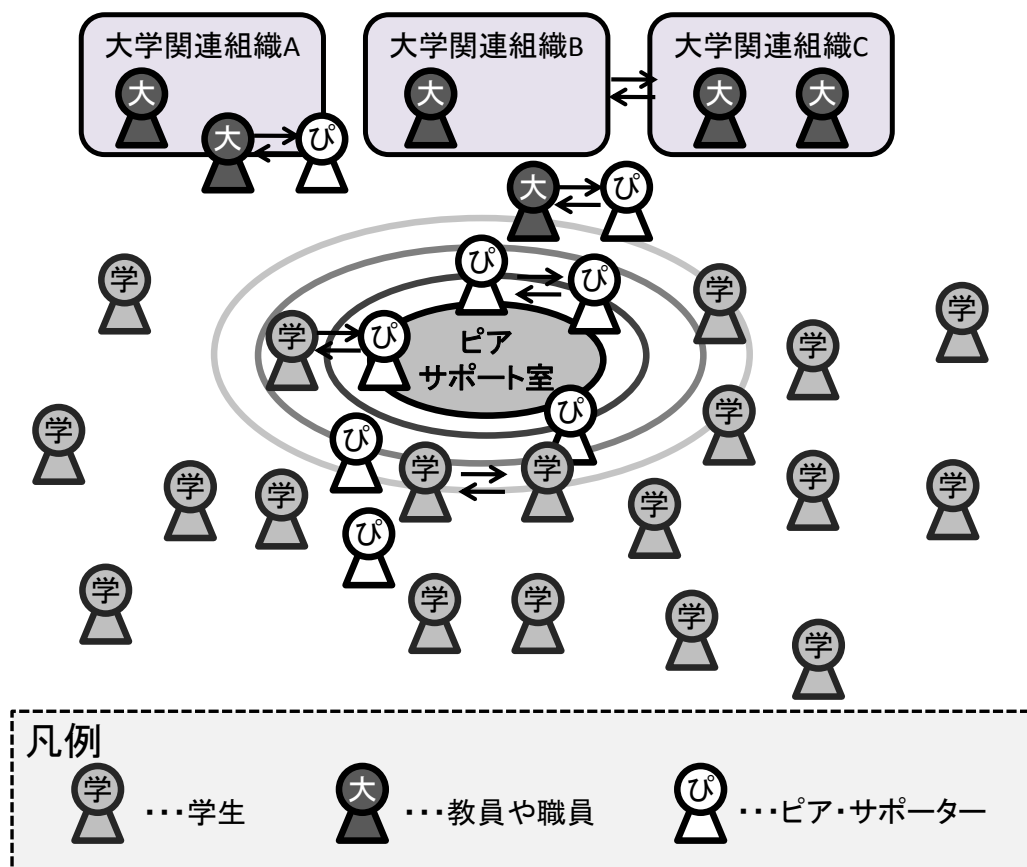


図-1 つながり創出型ピア・サポートのイメージ図

岡本(2011)の p. 24、図 5 を転載

¹⁰ この場合「教職員」を非常に広くとらえている。教員および事務職員のみではなく、たとえば、付属図書館や大学生協に勤めている人、清掃員や警備員なども含めている。

ピア・サポート室という場を中心にして、ピア・サポーターが様々な活動をおこなうことにより、そして、場合によってはピア・サポート室の外に出て交渉することによって、大学関連組織とピア・サポートをつなげたり、大学関連組織同士をつなげたり、ピア・サポーターと学生をつなげたりしていく。そうすることで、ピア・サポート室を中心として社会関係資本が蓄積されていく。この活動が徐々に大きくなっていけば、大学全体の持つ社会関係資本が増大すると考えられる。社会関係資本が増大していけば、個人の持つ様々な悩みや問題を周囲に相談することによって解決する確率が高まると考えられる。つまり、悩みや問題を抱えた人を対症療法的に相談によって解決するのではなく、もう少しメタな視点にたって、大学という社会内の社会関係資本を増大させることによって、その解決を図ろうという考え方である。

北海道大学ピア・サポートでは、この「つながり創出型ピア・サポート」を念頭に置きながら様々な活動を行ってきた。

4. ピア・サポーターのネットワーク

ここで、北海道大学ピア・サポートの人員確保のあり方について整理しておきたい。岡本(2011)でも整理したが、2012年3月現在までの動きをそれに追加する。ピア・サポーターのネットワークについて図示したものが、図-2である。

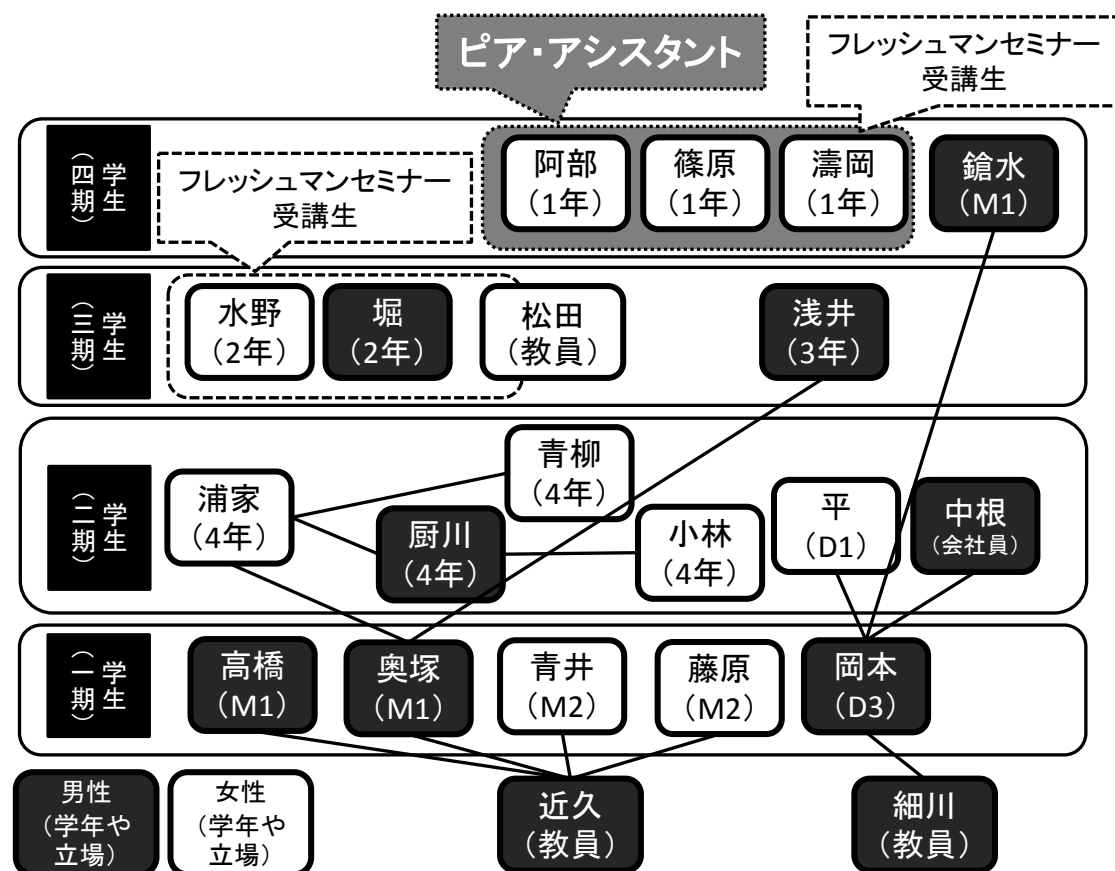


図-2 ピア・サポーターのネットワーク (学年は2012年3月時点)

岡本(2011)で整理したように、北大ピア・サポートの成員維持の仕組みは、メンバーによる人づてと、教員による一年生向け授業「フレッシュマンセミナー」をきっかけとするものの二つに分けられる。学生(三期)までは、岡本(2011)で整理してあるので、詳細はそちらをご覧ください。これら二つの成員維持の仕組みにより、学生(一期)には、工学部と国際広報メディア・観光学院のメンバーしかいなかった成員を、様々な学部、学年に拡大することができている。

一方で、中根氏は修士課程を修了して就職をしたため、ピア・サポートから抜けた。また、高橋氏、浦家氏は諸般の事情から、ピア・サポーターを辞めている。また、2012年3月をもって、青柳、厨川、青井、藤原、岡本が卒業や修了によってピア・サポートを抜ける。つまり、北海道大学ピア・サポートは人員を大きく減らすこととなる。

このことを受け、新たな試みも実施している。それは、ピア・アシスタント制度の導入と、公募制の導入である。

まずは、ピア・アシスタント制度の導入について整理する。学生(三期)には、松田康子先生によるフレッシュマンセミナーによって二人のピア・サポートメンバーが増員した。このフレッシュマンセミナーはテーマがピア・サポートであり、ピア・サポートに興味を持った人材が期待できる。

ここで、フレッシュマンセミナーを活用したさらに新たな取組みとして、学生(四期)にピア・アシスタントを導入することにした。北海道大学ピア・サポートの正規メンバーは学部二年生以上であり、一年生は正規メンバーになることができない。しかし、一年生の間からピア・サポートに興味を持ってくれる学生に対して、本来の業務の姿を見てもらうことが必要であるという発想から、給与などは出ないが、ピア・サポーターに準ずる活動をおこなうピア・アシスタントを導入した。これには、一年生から3人の参加があった。この3名はいずれもフレッシュマンセミナーの受講生であるが、このフレッシュマンセミナーは、前述の松田康子先生のものでは無い。観光学高等研究センターの山村高淑先生によるフレッシュマンセミナー「コンテンツツーツリズム入門」の受講生である。なぜ、この一見関係が無さそうな講義からピア・サポートに関心を持つに至った学生が3名も出たのか。それは、この講義のティーチングアシスタントとして岡本が、そして、聴講生として、平氏、鎗水氏、小林氏、が参加していたからである。その当時、北海道大学ピア・サポートでは、『苦楽戦隊ピア・レンジャー』という広報ビデオを制作しており(岡本ら 2011)、山村先生はそのことを授業の中で取り上げてくださったのである¹¹。このような形で興味を持った学生をピア・アシスタントとし、正式なピア・サポーターの見習いのような形で活動に参加してもらっている。これは、ピア・サポーターという立場とのマッチングを試す期間としても位置付けられる。ピア・サポートが実施するイベントや広報、ピア・サポート室の運用については、利用者として外から見て感じる魅力と、実際に実施する際の苦

¹¹ ちなみに、四期メンバーの鎗水氏も、山村先生のフレッシュマンセミナーに参加していた。鎗水氏は、『苦楽戦隊ピア・レンジャー』を作る上で、映像編集や音声収録等、様々な場面で尽力をしてくれ、現在正式なピア・サポーターとして活躍している。

劣にギャップがある場合もある。つまり、ピア・サポートに入ってみて「こんなはずではなかった」と感想を抱く場合である。これは、メンバーとして入っているにも関わらず、ピア・サポート室のシフトにほとんど入らないような態度や、イベント実施や広報活動に主体的に取り組まない者を増加させることとなる。そうした事態を回避するために、ピア・サポーターの取り組みの実際を見せておくためのシステムである。加えて、一年生ならではの発想を生かして、新たなアイデアを出してもらえするという利点もある。今回のピア・アシスタントは協力して、イベント掲示板という、北大内で行われている各種イベントを紹介する掲示板を作成し、ピア・サポート室に新たなコンテンツを追加してくれ、多くの利用者がそれを閲覧している。

次に、公募制の導入である。ピア・サポートの草創期には、まだ組織のあり方なども固まっておらず、公募制を導入することには抵抗があった。また、ピア・サポート自体の学生への認知も進んでいなかったため、公募をかけたところでほとんど集まらない可能性が高かった。そのため、四期までは公募は行わず、人づてや講義の受講者からメンバーを募る形を取っていた。しかし、前述したように、2012年3月で多くの成員がピア・サポートを任期満了で辞めることが決まっているため、多数のピア・サポーターを増員する必要がある。また、後述するが、ピア・サポート室の利用者数や相談者数は、様々な取り組みによって増加しており、利用者の中には、「どうやったらピア・サポーターになれるのか。自分もやりたい。」ということを探ねてくる学生も数名いたため、公募をしても、数名は手を挙げるという予測がついた。それを受け、2012年4月から本格始動するピア・サポーターを募り、面接試験などを実施した。結果、現在9名の新たなピア・サポーターが2012年4月からの活動に向けて、研修を積み、全体会議に出席するなどしている。

ピア・サポーターの新規募集については、これからも課題としてあり続けるだろう。それを考える際に重要なこととして、ここでは成員の多様性の担保を挙げておきたい。ピア・サポーターの新規募集を一元化するのも、安定的な持続性の観点からは重要かもしれない。しかし、新規募集のあり方を一元化すると、成員にある種の偏りが出始めることが予想できる。たとえば、ある特定の教員の特定の授業を受講した学生のみをピア・サポーターとする、というシステムを導入したとしよう。そうすれば、ピア・サポーターに向いている人間を効率よく成員として組み込むことができ、運営は円滑に進むかもしれない。価値観の対立などは無く、毎年ルーチンワークを粛々と進めていくようなグループになり、それを「安定的な持続」と考えることもできる。しかし、ここには、本稿で問題にしている、価値観を一つに定めた島宇宙、に進んでしまう危険性が内包されている。私見になるが、学生自身がこういったあり方を志向しているような場合もよく見かける。学生の自由な活動であるはずのサークル活動においても、自分たちを厳しく縛る規律を設け、それに従えない人間を排除するというような構造を自ら作り上げ、それを「伝統」と称して大切にする場合が見られる。大学という場で、企業や役所のようなシステムティックなやり方をゴっこ遊びで学んでいると言えよう。無論、そうしたあり方も社会で生きていく上では必要になる場合もあろう。しかし、大学という場では、こうした価値観すら相対的に扱い、疑

問に思うような思考を醸成しても良いのではないだろうか。果たして、大学におけるピア・サポートは、こういったあり方が望まれているのだろうか。「学生らしさ」とはこうした特徴のことを指すのであろうか。自らを縛る決まり事を作り、それによってしか物事を進めることができない、そのような学生を育てるのが大学の仕事であらうか。

ピア・サポートがその積極的な存在意義を持ち得るとすれば、それは上のようなあり方では無いあり方を続け、多様な学生が集まって、様々な学生の立場を考慮し、相談活動やイベント実施、ピア・サポート室運営などの機会を通して、学生に働きかけていくあり方が必要であらう。そのためには、ピア・サポーター内も多様である必要がある。誰かが提示したアイデアに付和雷同するようなあり方では無く、自分のアイデアをメンバーに提示し、メンバーから意見をもらい、そうした意見を自分の糧とし、自分のアイデアをブラッシュアップし、実施まで持っていく。そして、実施したことを評価し、自分の糧としていく。このようなことを実現するためには、画一的な価値観を持った集団では無く、異質な価値観を内包しうる集団である必要がある。

より単純な利点としても、幅広い学部、学年を集めることは相談業務の際に生きる。それを実現しようと思えば、一つの入り口よりも、様々な入口が有る方が良い。また、学生は学年によって問題となることが異なる。このことを整理して概念を提示したものに、鶴田(2001)がある。鶴田(2001)では、実際の相談事例から、大学生の入学から卒業までの「学生生活サイクル」ごとに直面する課題について整理がなされている(表-1)。

これを見ると、まず学生生活サイクルは、大きく学部学生と大学院学生に分けることができ、学部学生は、入学期、中間期、卒業期、の3つに分けることができる。それぞれの時期の課題をピア・サポーターは理解する必要がある。そうした時に、ピア・サポーター内で学年が多様であれば、それぞれの時期の課題を理解する際に良い影響を与えるだろう。また、大学院学生の課題は、学部生には理解しづらいため、大学院生のピア・サポーターがいることも重要な点と言えよう。ピア・サポーター内の成員を多様にしていくことを、意識的に継続する必要がある。

表-1 学生生活サイクルの特徴

	入学期	中間期	卒業期	大学院学生期
来談学生が語った主題	・移行に伴う問題 ・入学以前から抱えてきた問題	・無気力、スランプ ・生きがい ・対人関係をめぐる問題	・卒業を前に未解決な問題に取り組む ・卒業前の混乱	・研究生活への違和感 ・能力への疑問 ・研究室での対人関係 ・指導教官との関係
学生の課題	・学生生活への移行 ・今までの生活からの分離 ・新しい生活の開始	・学生生活の展開 ・自分らしさの探求 ・中だるみ ・現実生活と内面の統合	・学生生活の終了 ・社会生活への移行 ・青年期後期の節目 ・現実生活の課題を通して内面を整理	・研究者・技術者としての自己形成
心理学的特徴	・自由の中での自己決定 ・学生の側からの学生生活へのオリエンテーション ・高揚と落込み	・あいまいさの中での深まり ・親密な横関係	・もうひとつの卒業論文 ・将来への準備	・職業人への移行 ・自信と不安

鶴田(2001)p.4の表1より、筆者作成

5. ピア・サポート室の利用者数と相談者数

ここでは、ピア・サポート室の利用者数と相談者数の推移について整理し、利用者増に貢献した取り組みを抽出する。

北海道大学ピア・サポートでは、利用者数と相談者数をカウントしている。利用者数のカウント方法は以下の通りである。ピア・サポート室に踏み入れた人の数をピア・サポーターが目視によって数えている¹²。その基準は、シフトに入っているピア・サポーター以外の人間を全てカウントする、というものである。つまり、ピア・サポーターであっても、シフトに入っていないメンバーが来室した場合はカウントを行っている。また、ピア・サポート室内に荷物を置いて、出入りを行う人も入るたびにカウントしている。いわゆるのべ人数である。このように書くとあたかも水増しをおこなっているように見えるかもしれないが、実際カウントしてみると、元々部屋の中にいた人が再度入室したのか、新たに訪れたのか、ということは案外区別が付きにくいものである。また、ピア・サポーターの中にも、仕事をしながらピア・サポート室を同時に見て、人数を的確に数える能力を持つ者とそうでない者がいる。そのため、簡単なルールで人数のカウントの仕方を一定にする必要があり、単純なルールでカウントを行っている。また、カウントの仕方は一定であるので、季節変動やイベントの効果などを見ることができる。

相談者数については、相談があるごとにピア・サポーターによって相談カルテが記入されているので、その枚数を数えることによって算出している。

図-3 には、2011 年 3 月から 2011 年 11 月までのピア・サポート室への来室者数と相談者数をグラフにして示した。これを見ると、来室者数、相談者数は時期によって大きく変動することがわかる。来室者数も相談者数も最も多いのは 4 月である。相談者数に関しては、徐々に減少していく傾向にある。ただ、0 になってしまって長期間経過するということは無く、少しずつではあるが相談者はいる状態である。来室者数については、4 月が最大であることは同様であるが、相談者数よりも変動が激しい。4 月に一度ピークを迎えたのちに、一度は数を減らすのだが、6 月末から 8 月にかけて再度増加し、その後急落する。9 月末からまた上昇し、11 月も比較的数字が多い。8 月末の急落に関しては、夏季休暇に入るためであると考えられる。一般に、ピア・サポート室の来室者数や相談者数は、4 月に最高を記録し、その後減少し、後期が始まる 10 月に上昇し、また下降する、という動きを見せることが多い。北海道大学ピア・サポートの入室者数でも基本的には同様の波動を見せているが、6 月末から 8 月にかけての再度の増加が、他大学に見られない特徴である。

より全体の傾向を見やすくするために、岡本(2011)で示した 2010 年 4 月から 2011 年 2 月の月別相談者数と入室者数に続き、今回提示した 2011 年 3 月から 2011 年 11 月までの

¹² ただし、イベント時などで、大量の入室者が見込める時には、ビデオカメラで入口足元付近を撮影しておき、後日映像を見て正確なカウントをおこなっている。イベント時は、一時に大量の人が入ってくること多いし、その対応にも追われるので、目視による正確な人数カウントはほぼ不可能である。この点については、すでに実証済みである。ビデオカメラで入口足元付近を撮影してから数えた人数と、同時期に目視でカウントした人数を比較し、大幅に食い違うことを実験によって示している。

データを加えて、表-2 に表した。また、表-2 をグラフ化したものが図-4 である。

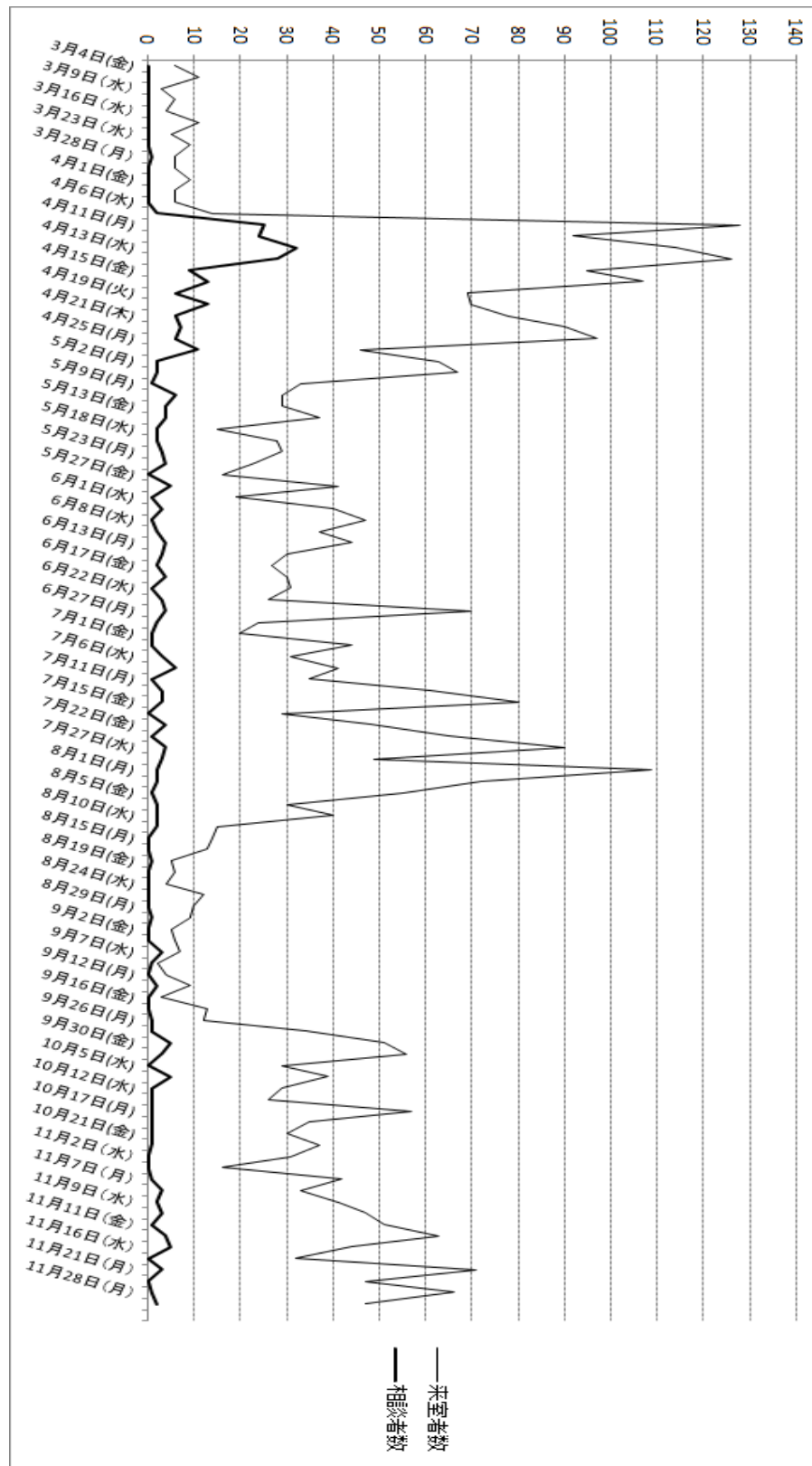


図-3 ピア・サポート室の来室者数と相談者数のグラフ
(2011年3月から2011年11月まで)

表-2 来室者数および相談者数の月別推移
(2010年4月から2011年11月まで)

	来室者数	相談者数
2010年4月	－	15
2010年5月	－	4
2010年6月	－	3
2010年7月	－	1
2010年8月	－	0
2010年9月	－	0
2010年10月	－	0
2010年11月	105	5
2010年12月	110	4
2011年1月	120	7
2011年2月	97	4
2011年3月	70	1
2011年4月	1147	182
2011年5月	410	35
2011年6月	425	30
2011年7月	593	30
2011年8月	394	13
2011年9月	146	13
2011年10月	338	14
2011年11月	631	25

(筆者作成)

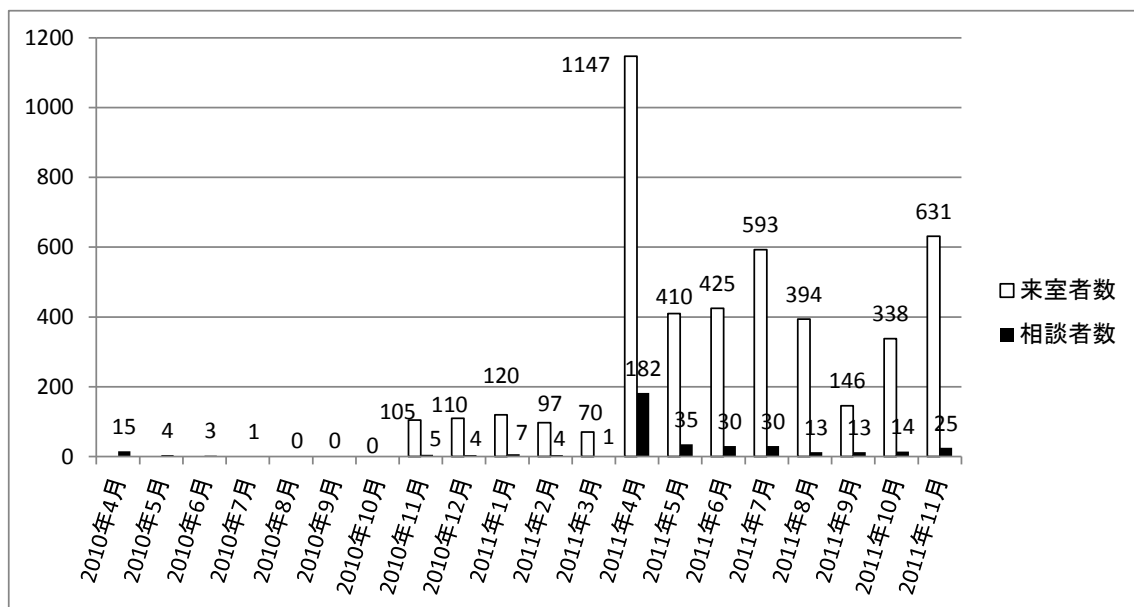


図-4 ピア・サポート室への来室者数および相談者数の月ごとの推移

(筆者作成)

図-4 を見ると、やはり 2011 年 4 月は群を抜いて来室者数および相談者数が多い。9 月は夏季休業の影響を受けて人数が落ち込んでいる。ピア・サポート室における基本的な月

ごとの来室者数は、2011 年 5 月の 410 人、2011 年 6 月の 425 人、2011 年 8 月の 394 人、2011 年 10 月の 338 人あたりであろうか。300 人から 400 人くらいの来室者数である。そのように考えると、4 月の 1,147 人、7 月の 593 人、11 月の 631 人は、他に比べて多いように見える。ただし、一点注意せねばならないのが、開室日の差異である。北海道大学ピア・サポートは、週に 3 回開室している。月曜・水曜・金曜である。また、特別なイベントの際には、臨時に毎日開室する場合もある。月ごとの数値では、これらの特殊な要因による人数の増減が考慮に入っていない。そのため、月ごとの来室者数を開室日で割った数値を一日の来室者数平均として算出し、グラフ化した(図-5)。

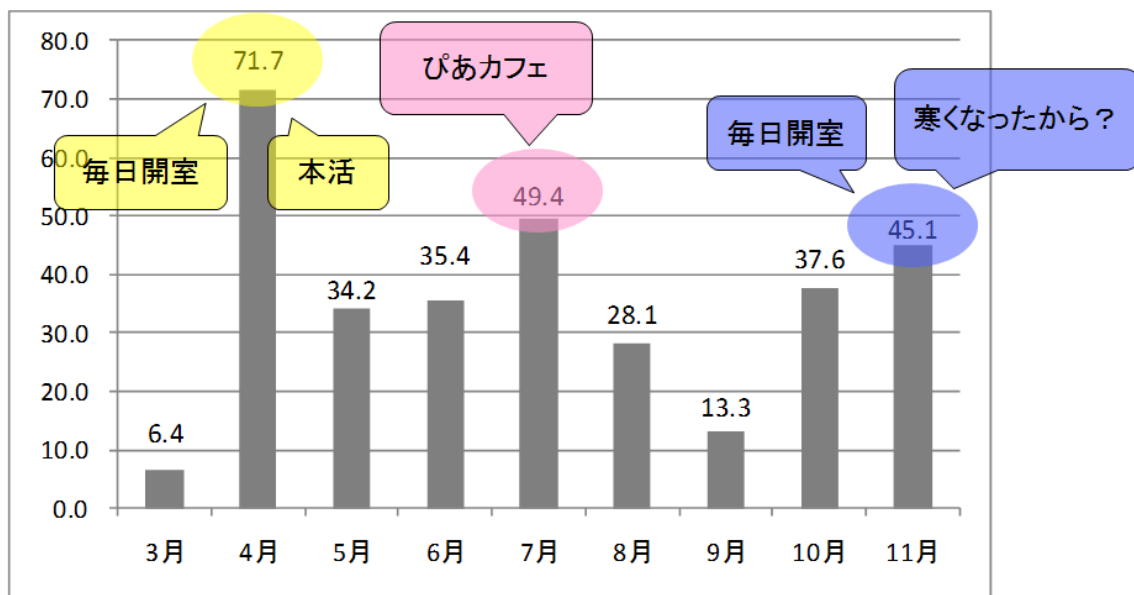


図-5 2011 年 3 月から 11 月の月ごとの一日来室者数平均
(筆者作成)

これを見ると、4 月は 1 日あたり 71.7 人がピア・サポート室に来室していることとなり、やはり人数が多い。標準的であると考えた 5 月は 34.2 人、6 月は 35.4 人、8 月は 28.1 人、10 月は 37.6 人となっている。一日あたり 20 人後半から 30 人後半くらいが標準であると言えよう。それから比較すると、7 月は一日平均 49.4 人、11 月は一日平均 45.1 人とやはり他に比べて多い。

その原因について、4 月は新入生対応として、本活および毎日開室を行ったことが考えられる。また、他大学と異なる傾向をしめした 7 月には、「ぴあカフェ」というイベントをおこなっている。そして 11 月は毎日開室を行っていることと、寒さが厳しくなったことで、暖房が効いているピア・サポート室で休憩時間や空きコマを過ごす人が増えたことが考えられる。各種イベントについては、本報告書に収められた別稿をご覧いただきたいが、ここでは、概要とそのねらいを整理していきたい。

6. 2011 年度本活の役割

「本活」とは、2010 年度から実施している北海道大学ピア・サポートのイベントである。この本活がどのような経緯で誕生し、実施されてきたのかについては、平・岡本(2011)をご覧ください。2010 年度の本活では、集めた本を学生に頒布する活動としておこなった。2010 年 4 月の段階では、ピア・サポート室は現在の場所ではなく、ボランティア相談室を間借りしていた状態であった¹³。そのため、学生の人通りが非常に少なく、呼び物となるイベントが必要とされていたため、行ったものである。2010 年度本活は成功をおさめ、400 人を超える来室者数を記録し、相談も 15 件あった。開始時間の前から列をなすなど、本活への期待の高さを示す事態も見られた。しかし、本活に訪れた多くの学生は、教科書が手に入るかもしれない、という期待による場合が多かった。教科書になっているような本は早々に配り終えてしまい、それ以降に来室した学生の中には教科書が無いと見るや立ち去ってしまう者もいた。もちろん、純粋に先輩が読んでいた本に興味を示して訪れる学生も少なく無く、また、教科書目当てで訪れた学生もピア・サポーターと会話をすることによって興味の幅が開かれ、教科書以外の本を持ち帰る学生も多かった。また、2010 年度本活の狙いは、学生からの情報収集やピア・サポーター自身のコミュニケーション能力の涵養であり、その点については成功したと言える。ただ、2010 年度本活はイベントとしては成功であったものの、その後に続くような取組みにはなっていないことが指摘できる。図-4 を見ると、4 月に相談者数が 15 人になったが、その後、数を減らし、8 月、9 月、10 月は相談者が 0 になっている。また、ピア・サポートによる単独開催であり、「ピア・サポーター」と「学生」を一時的につなぐイベントにはなっているものの、そこで止まってしまっている。

こういった反省を踏まえ、2011 年度本活では、本の頒布を取りやめた。回収した本は、ピア・サポート室内で閲覧できるような形にした。しかし、それだけでは、来室の動機を醸成するのは難しい。そこで、次の 2 点を導入した。

1 点目は、本の回収の際に、先輩からのメッセージや本に対する感想などを集めたことである。これらの集めたメッセージや感想などを、ピア・サポート室の廊下側外壁や、室内の壁に貼り付ける、書籍の帯として利用する、などを行い、先輩たちが読んだ本を、読んだ先輩の感想付で閲覧する、という形を取った。

これは、本とその紹介文を介して、先輩と後輩をつなぎ合わせるイベントと言えるだろう。つまり、「学生」と「学生」をつなぐイベントである。また、本を見ている学生にピア・サポーターが声をかけることで、本をメディアとして「学生」と「ピア・サポーター」をつなぐ機会が創出されている。

2 点目は、生協の書籍部との協働で、教科書の協同購入の受付を行うというものである。協同購入とは、生協書籍部のサービスであり、同じ書籍を複数冊購入することで割引が受けられるものである。北海道大学では、2011 年度入学の学生から「総合入試」制度が導入

¹³ ピア・サポート室の位置の移動については、藤原・岡本(2011)を参照のこと。

されている。これまで、学部毎に入試を実施していたのを、一部、学部を決めずに総合理系、総合文系という形で入学させるというものである。北海道大学では、一年次はクラス制度を取っている。この総合入試が導入される前は、基本的に同じ学部の一年生同士でクラスが組まれていた。たとえば、1組から4組は文学部という具合である。クラスは基本的に同じ学部の人々から成っていたのだ。しかし、総合入試を導入した際に、様々な学部から成るクラスを作るようになった。すると、この協同購入が成立しづらくなる可能性が高まる。クラス内に同じ学部の人ばかりであった時には、自然と受講する講義も同じようなものになるため、協同購入が起りやすく、この協同購入を通して、クラスの知り合いを得る場合も多かった。ところが、同じクラスの中に様々な学部の学生が入り混じっていると、同じ講義を受ける人数が少なくなり、協同購入が成立しない可能性が増大することである。そこで、協同購入の成立をピア・サポート室で助けようと考え、この取り組みを導入した。

これも、教科書の協同購入の手続きを通じて、「学生」と「学生」をつなぐイベントとみることができる。そして、生協の書籍部という「教職員」と「ピア・サポーター」をつなぐ取り組みでもある。

しかし、この協同購入サポートの取り組みについては失敗に終わった。協同購入は同一の書籍を10冊以上購入することで成立する。協同購入の申し込み自体は数多くあったものの、10人そろって、実際に購入までこぎつけた例は残念ながら無かった。本活の反省会で、生協書籍部の担当者から伺ったところによると、全体としても、協同購入の成立件数は下がったそうで、予測通りの結果となった。課題の予測は間違っていなかったわけだが、それを解決する方法を誤ったと言えよう。この反省を生かし、2012年4月の本活では協同購入を成功させてほしい。ただ、この点について、一点成果を見出すとすれば、ピア・サポーターが他組織と問題を共有できたことである。協同で実施することにより、大学で起こっている問題について、生協の書籍部とピア・サポートが問題を共有でき、次に活かせる知見が得られたことは、大きな成果であると言えよう。

また、2011年度本活は、全体的には大成功をおさめたと言える。図-4に示したように、一か月間で来室者数が1,147人、相談者数が182人を記録した。相談の中で多かったのは、履修に関するものである。特に、前述した総合入試で入学した学生による履修関係の相談が多かった。それと言うのも、総合入試で入ってきた学生は、1年次の成績で2年次から学部の分属があるからだ。少しでも希望の学部に入れるようにということで、講義の取り方に関する真剣な相談が多く見られた。中には、自分で作成した時間割を持ってきて、「これで大丈夫でしょうか？」というような相談も多くあった。

来室者、相談者ともに多かったことで、新入生は「この部屋は自分たちが使うことのできる部屋だ」という認識を持ったと見え、その後も来室しやすくなったようである。それを示すデータとして、2010年11月に比べると2011年11月の来室者数は約6倍、相談者数は5倍である。4月の段階で、多くの新入生にピア・サポート室を利用してもらうこと

で、その認知度が高まり、その後の利用も増えることがわかる¹⁴。

利用者数や相談者数が増ければ、その分、ピア・サポーターのシフト中の仕事は増加し、モチベーションの低下にも歯止めがかかるだろう。つまり、ピア・サポートの認知度を上げるには、ただポスターを貼ったり、チラシを配ったりするというような消極的な広報では無く、積極的に部屋を使ってもらうような仕組みを導入し、たくさんの学生が利用しているという事態を作り上げる必要があるということだ。

印象になるが、4月に何もせず、学生が入室してくるのをピア・サポート室で待っていても、これほどまでの来室者数や相談者数は無かったように思う。新入生に、「北海道大学にはピア・サポート室があり、自分たちが使っても良い部屋なのだ」ということを認識させる工夫は毎年何らかの形で必要であろう。

また、本活を契機として、新たな大学内のアクターとのつながりに発展したことも特筆すべき点である。その新たなアクターとは、キャリア教育支援室や北海道大学付属図書館である。2011年度には、キャリア教育支援室との共同イベントを開催した。また、2012年度に実施する北海道大学付属図書館との共同企画も動き出しており、本活を実施したことによって、さらにつながるアクターが増加させることができていると言える。

7. ピア・カフェによって浮き彫りになった問題

7月の来室者数に影響を与えているピア・カフェは、ピア・サポート室でカフェを開くというものである。7月1日、4日、6日、8日、11日、15日に開催された。詳細は、本稿に掲載されている他の論考に譲るが、以下、その様子を概観したい。

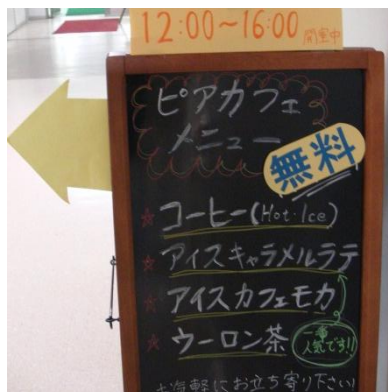


図-6 ピア・カフェの立て看板
(2011年7月15日：筆者撮影)

図-6はピア・カフェの立て看板である。コーヒーやアイスキャラメルラテ、アイスカフェモカ、ウーロン茶を無料で提供した。

ピア・カフェの目的は、ただ無料で飲料を提供するというものではない。そうでは無く、

¹⁴ とはいえ、実際に運用していると、2011年入学の1年生の中には、2012年2月現在でもピア・サポート室に入室したことが無い学生が多くいる。また、協同購入が思ったように成立しなかったのも、やはりまだ利用者が少ないことに理由があると考えられる。4月のさらなる来室者増が求められる。

飲料の提供を通して、「ピア・サポーター」と「学生」とのつながりを創出していこうとするものである。飲料を提供する際には、注文を聞きに行く必要がある、そして、飲料を実際に提供する必要がある。つまり、ピア・サポーターと学生の相互作用が可能な場が2回確実に訪れる。

しかし、この2回の接触の際、うまく話を広げることはピア・サポーターそれぞれの力量にかかっている部分が多い。失敗すれば、ただの店員としての役割を担ってしまう危険性もある。注文を聞いて、飲料を作り、出す、それだけの役割になってしまう危険性である。それでは、今回の目的を達成することはできない。そこで、ピア・サポーターそれぞれの個性を出した展示をおこない、その展示をきっかけに話を広げ、顔の見えるピア・サポーターとして利用者に認識してもらうことをねらって、次のような形式で実施した。



図-7 ピア・サポート室内の展示
(2011年7月15日：筆者撮影)

図-7 左に示した写真は、ピア・サポート室内の展示のうち、著者がおこなった展示である。著者はゾンビ映画鑑賞が趣味であるため、ゾンビに関する展示を実施した。テーブルには「CAFÉ OF THE DEAD ー死霊の珈琲」と銘打って、ゾンビ映画に関連する書籍を並べた。このように、それぞれの学生の趣味についての展示をおこなったのである。テーブルには、展示を実施したピア・サポーターの自己紹介などもあり、これによってピア・サポーターそれぞれを一人一人の人間として認識してもらうようにした¹⁵。

図-7 右の写真のように、並べられた展示に興味を示した学生がいれば、ピア・サポーターから近づいて行って声をかける。一般に、ゾンビ映画が趣味というと、なかなか同好の士は見つからないのが常であり、今回の展示に際しても、誰も興味を示さないのではないかと内心心配をしていたのだが、意外にも多くの利用者が手に取って眺めていた。図-7 右の写真でも見てとれるが、女性の場合も多かった。

¹⁵ ピア・サポーターという役割を背負った学生事務員、ということではなく、ピア・サポーターをやっている〇〇さん、という認識ということである。

このような相互作用の場を演出することにより、ピア・サポーターと学生や、学生同士のつながりを創出した。図-8 は、ピア・サポート室の全体像である。各テーブルに、様々な展示がなされていることがわかる。写真左側の緑色のジャンパーを着ている者がピア・サポーターである。飲料の提供の際に、利用者と対話している様子が見てとれる。



図-8 ピア・カフェ時のピア・サポート室
(2011 年 7 月 15 日：筆者撮影)

このイベントの際、代表として「自由に展示して良い」という形でメンバーに伝えたのだが、ピア・サポーターの中から、何らかのフォーマットが欲しい、という声があがった。あるいは、展示に統一感が無い、というような声も聞かれた。ピア・カフェ一日目入室者数が少なく、それを「展示が邪魔であるから」と結論したサポーターもいた¹⁶。そうした声をあげたメンバーも、最終的には、それぞれに工夫を凝らした展示をおこない、利用者とコミュニケーションを取ることができ、良かったと思うが、この「定型に当てはめたい」、「前例がないと何をして良いのかわからない」、「普段と違うことはしたくない」

¹⁶ 実際には、展示が邪魔というよりは、広報のわかりにくさやサポーター側が声かけなどをしなかったことが大きく影響していたと考えている。その証拠に、意識を改革した 2 日目以降は展示があるにも関わらず、順調に利用者数を伸ばしている。ここにも、ピア・サポーターが学生同士であること、の危険性が見え隠れしている。学生の声すべて正しいと思って取り上げては、活発な活動は持続しない。

というような考え方は、ピア・サポーターとして、大学生として問題があると感じた。これから社会を作っていく人材である大学生は、もっと自由に思考を巡らせ、アイデアを表現し、新たなことに取り組んでいく必要があるだろう。そして、大学という場はそれが許される場所であるべきだ。グローバル化と言われて久しいが、英語をはじめとした外国語の能力を伸ばしたところで、表現すべき何かを持っていない場合、高く評価されることなどあり得ない。ピア・サポートは、率先して、価値観が自由であり、多様であり、活発に活動し、可能性を感じることができる場を提供する存在であることが期待されよう。今回のことから明らかになったことは、活発な活動を継続させ、成功に導くためには、消極的な意見や積極的な意見、様々な意見をきっちりと表現し、議論し¹⁷、最適な解を導き出す仕組みや人が必要であることだ。

8. つながり創出型ピア・サポートの成果と課題

ここまで、北海道大学ピア・サポートの取り組みを概観してきた。つながり創出型ピア・サポートを目指し、様々な活動に取り組んできたが、その成果と課題を提示したい。

つながり創出型という狙い通り、ピア・サポーターと学生、学生同士、ピア・サポーターと大学関連組織などのつながりが創出されている。本活やピア・カフェを実施し、来室者数を増やし、成功させることによって、更なるつながりが創出できていると言える。生協の書籍部、キャリア教育支援室、北海道大学付属図書館と言った、大学関連組織と共同でイベントを行い、つながりを持つことに成功している。特に生協の書籍部とは、問題意識の共有にまで至っている。一般に、生協の書籍部とキャリア教育支援室、付属図書館が協働するという事態はあまり無いのではないだろうか。それも、ピア・サポートが間に入り、いずれの組織にも活躍してもらえるようなイベントを実施すれば可能となるのである。ピア・サポートの積極的存在意義の一つはこの点にあるだろう。学生という立場であれば、大学内で比較的自由な動きを取ることができる。そのため、業務として連携を考えないような部署同士でも、学生目線から見ると連携した方が良い部署を工夫次第でつなぐことができるのである。こうすることで、大学内にある様々な学生支援のための資源を、学生に最適な形で紹介することができるのである。

また、持続性の観点からは以下のことが言える。本活やピア・カフェといったイベントの場が来室者でにぎわい、相談者数が増えることにより、新たなピア・サポーターの確保も容易になるということだ。無論、これはいたずらに来室者数のみを上げれば良いという意味では無い。本稿でも、つながりを創出するような取り組みの重要性を説いている。この両方を満たすような取り組みを実施するのである。利用者や相談者が少ないのは、やはりピア・サポートが学生のニーズをうまくとらえられていないと考えるべきだろう。ピア・サポートが企画したイベント参加者が非常に少なかったらどうだろう。ピア・サポートの

¹⁷ この際の議論は、相手を打ち負かすディベートのようなものではない、相手を尊重しつつも、意見についてはしっかりと述べ、考えを交換するディスカッションである。

周知が進まないのももちろんであるが、そんな活動を一般学生が見て「自分もやりたい！」などと思うだろうか。また、「ピア・サポーターに相談してみよう」などと思うだろうか。やはり、ピア・サポーターの企画したイベントを活用する学生が多くいて、その中で、ピア・サポーター個人の顔が見えること、そのことによって、ピア・サポーターに相談してみようと思ってくれる学生は増え、自分もピア・サポーターになりたいと思ってくれる学生も増えることだろう。そうすれば、モチベーションの持続も人数の安定的な供給も継続すると考えられる。この循環に必要な具体的な策は、イベントの評価を誰かがおこない、次への糧と位置付けることである。

一般に、ピア・サポーターは自分たちが企画したイベントが失敗に終わったなどとは思いたくないはずである。しかし、失敗した部分は失敗、成功した部分は成功、ときっちりと結果を評価していかなければ、徐々に「実施することに意味がある」という状態になりかねない。「来場者は少なかったけれど、自分たちで企画して、実施できたから良いじゃないか」という価値観である。これは、非常に独りよがりな価値観である。このような価値観は、社会の様々なところに転がっている。誰のためになっているのかわからないサービスは数多く存在する。そのようなものを生み出す「社会人」を輩出することは、社会にとっての大学の価値を著しく低下させることになるだろう。イベントの責任者を決め、メンバー同士で議論をおこない、それを元に責任者が進め、評価をまとめる。これはもちろん、責任者に責任をなすりつけるようなことであってはいけない。責任者は、メンバーを代表してイベント実施を進めてくれる人であり、それだけで評価されるべきだ。お互いを尊重し合い、イベントの成否は全員の責任であるとすべきであろう。そして、責任は、次に実施する際の改善点を示すことによって果たす。どのような方法を取るにせよ、ピア・サポーターが独自の観点から何かを実施し、その結果を自分たちで評価し、さらに上を目指す、そうしたマインドを持って当たらない限り、ピア・サポートの積極的な存在意義は薄く、持続可能性も低いと言えるだろう。型どおりのルーチンワークをこなす集団や、教職員の命令に従って動く集団などでは、積極的な存在意義を見出すことは難しい。

北海道大学ピア・サポートの課題として挙げたいのは、ピア・サポーター同士の関係性構築の点である。最初に指摘したとおり、ピア・サポーター同士の凝集性があまりに高まると問題は多い。しかし、普段ピア・サポーターは2人体制でシフトに入っており、シフトのめぐりあわせによってはほとんど顔を合わせないメンバーが出てくることもある。これでは、意思疎通が難しい。実際に運営していても、何かイベントごとをやろうと誰かがアイデアを出しても、メンバー全員への周知がうまくいかない場合が多々見られた。この点については、前述したように、凝集性を高め過ぎないように注意しつつも、全体会議のやり方や、メーリングリストの活用の仕方を再考し、新たなアイデアやシフト中にあったトラブルへの対処法などをメンバー間で共有することに重点を置く必要があると感じる。

以上、北海道大学ピア・サポートの取組から、ピア・サポートの積極的な存在意義と活発な持続に関して考察をおこなった。ピア・サポートは「学生同士」であるから、というそれだけでは無条件に良い活動にはならない。そのことを教職員はもとより、学生自身も心

得て、その上で、自由に思考を巡らし、試行錯誤して、より良い大学生活をデザインしていく。北海道大学ピア・サポートは、そのような積極的な存在意義を持ち、活発な活動を継続していく存在であり続けて欲しいと願う。

【参考文献】

浅野智彦

2011 『趣味縁からはじまる社会参加』, 岩波書店

内野悌司

2003 「広島大学ピア・サポート・ルームの初年度の活動に関する考察」『学生相談研究』, 23(3), pp.233-242

宇野常寛

2008 『ゼロ年代の想像力』, 早川書房

大石由起子

2010 「高等教育におけるピアサポート導入の教育的効果と期待」『大学と学生』, 87, pp.16-21

大畑昇・岡本健

2011 「《巻頭対談》大畑昇×岡本健 北海道大学ピア・サポートによせる想い」『北海道大学ピア・サポート活動報告書(平成 22 年度版)』, pp.1-4

岡本健

2011 「北海道大学ピア・サポートの誕生と展開 一つながり創出型ピア・サポートの提案」『北海道大学ピア・サポート活動報告書 (平成 22 年度版)』, pp.5-25.

岡本健・小林なつみ・青柳祥子

2011 「ピア・サポート広報の新たなかたち ―広報ビデオ「苦楽戦隊ピア・レンジャー」撮影秘話」『北海道大学ピア・サポート活動報告書(平成 22 年度版)』, pp.69-89.

菅野仁

2008 『友だち幻想 一人と人の＜つながり＞を考える』, 筑摩書房

九州大学学生生活・修学相談室

2007 「2006 年度学生生活・修学相談室活動報告 ―ピア・アドバイス活動」『学生相談(九州大学学生生活・修学相談室紀要)』, 9, pp.93-95.

杉村和美・鶴田和美・加藤容子・船津静代・津田均・赤堀薫子・小川豊昭・鈴木國文

2004 「名古屋大学における学生が学生を支えるしくみ」『名古屋大学学生総合相談センター紀要』, 4, pp.3-14.

鈴木健一

2006 「金沢大学ピア・サポート・システムの構築と課題」『CAMPUS HEALTH』, 43(1), p.287

平侑子・岡本健

- 2011 「人々をつなぐイベントの創出 ―北大ピア・サポート企画「本活」の報告」『北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成 22 年度版）』, pp.27-51
- 高野明・吉武清實・池田忠義・佐藤静香・関谷佳代・仁平義明
- 2006 「東北大学における修学支援を中心としたピア・サポート」『東北大学学生相談所紀要』, 32, pp.9-15.
- 高谷邦彦
- 2011 「現実の私・ウェブ上の私 ―学生たちのコミュニケーション環境」松野良一(監修)『デジタル時代の人間行動』, 中央大学出版部, pp.15-26
- 土屋貴之
- 2010 「ピア・サポートの可能性」『大学と学生』, 87, pp.29-43.
- 鶴田和美・桐山雅子・吉田昇代・若山隆・杉村和美・加藤容子
- 2010 『事例から学ぶ学生相談』, 北大路書房
- 富田英典
- 2009 『インティメイト・ストレンジャー ―「匿名性」と「親密性」をめぐる文化社会学的研究』関西大学出版部
- 土井隆義
- 2008 『友だち地獄 ―「空気を読む」世代のサバイバル』, 筑摩書房
- 橋元良明・奥律哉・長尾嘉英・庄野徹
- 2010 『ネオ・デジタルネイティブの誕生 ―日本独自の進化を遂げるネット世代』, ダイヤモンド社
- 早坂浩志
- 2010 「学生に向けた活動 2 ―授業以外の取組み」日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会(編)『学生相談ハンドブック』 pp.185-201.
- 早坂浩志・大久保ちひろ
- 2007 「岩手大学におけるピア・サポートの取組」『大学と学生』, 515, pp.58-63
- 藤原美津穂・岡本健
- 2011 「ピア・サポート室の位置と環境 ―学生がすごしやすい環境をいかにデザインしていくか」『北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成 22 年度版）』, pp.53-68.
- 北海道大学学務部
- 2011 『学生生活実態調査報告書 2010 年版』
- 山下啓司・森やよい
- 2007 「工学系単科大学におけるピアサポートシステム構築」『日本学生相談学会 第 25 回大会発表論文集』, p.84